

身体文化の実践に関する考察

：キックボクシングを事例に

木 本 玲 一

はじめに

本稿は、キックボクシングを事例に、身体文化の実践に関する経験的考察をおこなうものである。

キックボクシングとは、タイの格闘技であるムエタイを参考にしながら、1960年代の日本で生まれた格闘技である。1960年代から1970年代にかけて、キー局でテレビ放送がなされるほどに、キックボクシングの人気は高まったものの、以降は団体の分裂や乱立を経て、マスメディアの注目も少なくなっている。

しかし現在でも、キックボクシングの興行は盛んにおこなわれ、多くのプロ選手¹が活動している。また多くのジムがアマチュアにも広く門戸を開いており、運動不足解消やダイエットなどの目的でジムに通う一般人も少なくない。

本稿では、キックボクシングの実践を身体文化という概念を通して記述していく。詳しくは後述するが、身体文化とは、様々な次元において身体化され、身体を通して立ち現れる文化を意味する。

社会内存在としての私たちの振る舞いの多くは、特定の時空間における社会化を経た、身体文化の現れとして理解できる。その中でも本稿が関心を寄せるのが、スポーツ、特にキックボクシングにおける身体である。本稿は、個別具体的な事例の記述を通して、身体文化の一側面を捉えることを目指す。

以下ではまず、キックボクシングというスポーツについて、歴史的発展をふまえながら概観する。次に、身体文化を記述するという本稿の問題関心と、調査の方法論について言及する。さらにフィールドデータをもとに、キックボクシングにおける身体文化について記述していく。そしてデータをもとに身体文化を類型化し、個々の次元

について考察をおこなう。

キックボクシングという格闘技

キックボクシングは、1960年代の日本で生まれたスポーツである。当時、ボクシングのプロモーターであった野口修は、タイの格闘技であるムエタイに惹かれ、日本での興行を検討していた。その際に日本人に馴染みやすい名前を考え、キックボクシングと命名した。

しかし当初は選手がいなかったため、野口に誘われた白羽秀樹（沢村忠）、藤本勲などの空手家が、キックボクサーとしてリングに上がった。以降、キックボクシングはキー局でテレビ放送されるほどの人気を獲得したものの、近年では団体の分裂などが続き、かつてのような人気、知名度はない。

キックボクシングのルールは、必ずしも統一されていない。しかし基本的には、6メートル四方を目安としたリングの上で、グローブを着けた選手が、体重別の階級ごとに1対1で戦うフルコンタクト（寸止めせずに直接打撃を当てる）の格闘技である²。主な攻撃としては、拳による攻撃（パンチ）と足による攻撃（キック）をベースとしている。ルールによっては立っている状態で選手同士が組んでバランスを崩しあう「首相撲」や、肘による攻撃などが認められる。目つぶしや金的、頭突き、噛みつきなどは、ほぼ禁止されている。

1ラウンドの時間は2分から3分で、ラウンド間に1分から2分の休憩をはさみ、3ラウンドから5ラウンド戦って勝者を決める³。勝敗はノックアウト、または判定によって決められる。

キックボクシングでは、国内だけでも24の団体が存在し⁴、それぞれ独自のルールを制定したうえで、加盟しているジムの選手が出場する興行を企画する。また多くのジムは、プロ選手を養成するだけでは経営が成り立たないため、フィットネスやダイエット目的のアマチュアにも広く門戸を開いている。

身体文化概念と調査の方法論

本稿では、身体文化の記述を試みるが、その前に身体文化という概念に関して、簡単に整理しておきたい。

身体に関する学術的な議論の中でも大きな影響力を持ってきたのが、ミシェル・フーコー（Foucault, Michel）の身体論である。フーコーは、「人体は権力装置のなかに含みこまれ、その装置は人体を検査し分解し再構成する」とし、近代的な身体を権力

の反映として論じた (Foucault 1975=1977:143)。そして「ディシプリン」(discipline) という概念で、「身体の運用への綿密な取締りを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順=効用の関係を強制する」(同) 方法を捉えた。

フーコーの議論は、主として<近代>という時空間における身体の有様を問題としており、一般理論としての汎用性は高い。しかし一般理論であるがゆえに、個別具体的な身体の有様を捉える枠組みとしては不向きであるといえる。

たとえばボクサーの身体文化について論じた石岡丈昇は、次のように述べる。

(引用者註：身体文化とは)「身体に刻まれた文化」のことである。ボクサーの日常でいえば、ジャブの打ち方や減量の仕方、さらには彼らに固有の引退後の職の獲得法など、身体と一体になった状態で、実践され継承されていく文化である。そしてそうである以上、身体文化は、その文化的形式のみを身体から切り離して論じた瞬間に。もはや身体文化ではなくなる。身体文化は一般化や普遍化を許さない概念、つまりつねに身体が置かれた個別具体的な状況の中で論じられるものとしてあるのだ (石岡 2012：8 頁)

石岡の指摘で重要なのは、「身体文化は一般化や普遍化を許さない」という点である。フーコーを参照するなら、キックボクサーの身体は、(近代的な)権力の反映かもしれない。しかしそれは野球選手や教師、警察官にもあてはまる話である。「普遍化を許さない」ほどのミクロな身体の有様は、一般論ではなく、ミクロな事例の記述によって捉えられるべきである。

そこで本稿では、石岡にしたがって、身体文化という概念を用いていく。石岡の議論は、主にプロボクサーを念頭に置いたものであるが、本稿では、アマチュアのキックボクシング実践における身体文化の有様をみていく。アマチュアは競技により生計を立てたり、過酷な減量に取り組んだりすることは少ないものの、プロとは異なった次元で、独自の身体文化を実践している。

本稿で取り上げるアマチュアとは、私自身のことでもある。私は2013年の2月から、現在(2014年2月)に至るまでキックボクシングの“A”ジムに通っている。ジムに通い始めた時の私は37歳で、格闘技経験はおろか、運動経験すらなかった。キックボクシングにまつわる身体文化は、私にとってまったく縁のないものであった。私はジムでの練習を続けながら、フィールドノーツを書き溜めてきた。つまり自分の身体を使ってキックボクシングを実践すると同時に、その様を再帰的に記述してきたのだ。

こうした方法論は、記述の客観性の点から、批判される可能性がある。しかし石岡が言うように身体文化が「身体に刻まれた文化」である以上、自分の身体に刻み込む

ことでしか記述できない領域も存在すると考えられる⁵。本稿が目指すのは、まったくの「素人」が、いかにキックボクシングという身体文化を自らに刻み付けていったのかを記述し、それが何を意味するのかを考察することである。

入会当初

私は、2013年の2月に、知り合いが出場するというので、アマチュアのキックボクシングの試合を見に行った。その試合は、40歳以上のアマチュア選手が参加する大会だった。プロの試合のような迫力はないものの、必死で戦う中高年の姿に新鮮なものを感じ、いつしか感情移入していた。私は特に根拠があったわけではないが、「自分でもできるかもしれない」という感覚を抱いた。

翌週、私は神奈川県のア“ジムを訪れた。ア“ジムは、一部のプロ選手を除けば、アマチュアの会員がほとんどのジムである。ジムの会長⁶の説明では、運動経験などの有無は問題ではなく、各人のペースに合わせて練習できるということだったので、その日のうちに入会した。以下は、はじめて練習した日のフィールドノーツからの抜粋である。

ジムに入ったのは15:40くらい。挨拶して中に入ると、高校生くらいの人が一人練習中。(中略) まずは柔軟から。斜めになった台のようなものに立ち、身体を伸ばしたりしていく。屈伸をしてみると「なかなかの硬さですね」と言われる。柔軟の最中に腕がつる。

その後、ステップ⁷を覚えてもらう。相手に向かって左足を垂直に前に出し、右足は45～90度。肩幅程度に足を開く。そのまま前後左右に動くわけだが、ともすれば左足がブレたり、両足が狭くなりすぎたりする。鏡の前で、自分でチェックしながらやるように言われる。

ひとしきり鏡の前で練習してから、左ジャブ⁸と右ストレート⁹の打ち方を教わる。グローブをあごの高さに置き、ジャブは打ってすばやく引く。右ストレートは「右足でたばこを踏み消すようなイメージ」で足、そして腰をひねりながら、まっすぐに打ち込む。「右ストレートは足で打つ」と言われる。拳が横を向かないように注意する。しばらくシャドーを続けるが、パンチを意識するとステップが変になってくる。そのため、ストレートを打った後に身体がブレる。意識せずにステップができるようになる必要がある。

その後、会長がミット¹⁰を持ってくれ、ミット打ち。ジャブ、ストレート、ジャブ、ジャブ、ストレートなど、指示に従って打ち込んでいく。やはりステップが課題。

インターバルを挟んで、サンドバッグ¹¹打ち。ミットと違って、硬く重い。ジャブで距離を取るようなイメージで、ストレートを打ち込む。疲れてくると、ついついガードが下がったり、拳を戻すスピードが遅れてくる。またパンチ力も無いに等しいので、「ボス、ボス」という情けない音がするのみ。

ここからは、私がいろいろなことを教わりながらも、それらをあまり消化できていないことが伺える。ステップからパンチまで、知識としては教わったことを理解できても、身体感覚として捉えることができていない。この時の私は、ジャブの打ち方を口頭で説明することはできて、実際に「正しい」ジャブを打つことはできていない。それは私のなかにジャブの打ち方が身体文化として刻み込まれていないためだ。

ステップ、そしてジャブ、ストレートは、技術の基本であるとされ、初心者が最初に教わるものである。この練習は大きな鏡の前で行っており、自分でフォームを確認しながら、必要に応じて修正を加えていくことが求められる。これはシャドーと呼ばれる。

またミットやサンドバッグは、打撃を直接あてる感覚を養うものである。“A”ジムでは、シャドーとサンドバッグを交互におこなうことで、「正しい」フォームと打撃の感覚を共に養っていく。こうした反復練習は、以降もジムに通うなかでも主要な練習メニューとなっている。

そこで重要なのは、ただ単にメニューをこなすだけではなく、トレーナーや会長からの指示や、シャドーの際に自分で気づいた修正点をふまえ、反復練習をおこなうことである。練習する人々は、反復練習を通して、いかなる場合にも「正しい」フォームで技が出せることを目指す。この場合の「正しい」フォームとは、力学的にもっとも有効な打撃を相手に加えられるフォームであり、相手の攻撃を防げるようなフォームである。

入会からしばらくの間は、パンチやキックの技や、ディフェンスの仕方を少しずつ教わり、個人でそれを反復練習するということが続いた。具体的には、初日に教わったジャブ、ストレートに加え、フック¹²、アッパー¹³などのパンチや、ローキック¹⁴、ミドルキック¹⁵、前蹴り¹⁶などのキック、パーリング¹⁷、ダッキング¹⁸、スウェー¹⁹、キックのカット²⁰などのディフェンス技術を教わった。それらは、身体文化を刻み込むプロセスであったといえる。

2か月ほど、週に3～5回のペースでジムに通って練習を繰り返すうちに、打撃が当たった時の音が大きくなったことに気付いた。また会長やトレーナーの人から、「体力ついてきましたね」などと声をかけられるようになった。反復練習を続けるうちに、私は個々の技術を身体化しつつあった。

私は、打撃力が上がったり、褒められたりすることにささやかな喜びを見出していた。運動や格闘技の経験が全くなく、体力にも自信の無い中年である私にとって、肉体的に「強い」という自己認識は、まったく存在しなかった。しかしそれが徐々に変

化し、多少なりとも「体力がついた」、「強くなった」と感じられるようになる。それは身体文化の実践が導いた、セルフ・アイデンティティの更新であるといえる。

対人練習

ジムの練習では、シャドー、サンドバッグ、ミット打ちに加え、ある程度慣れてくると対人練習が加わる。“A”ジムのアマチュアの対人練習は、2人1組になってのディフェンスの練習と、キックを中心としたマス・スパーリングに分けられる。

前者は、パンチやキックを決められた回数だけ出し、相手はそれを避けたりカットしたりするというものである。後者は、キックを中心に実際の試合のような形式で50%程度の力でスパーリング²¹をするというもので、蹴りマスとも呼ばれる。いずれの場合でも、すねあてや、必要に応じてひざあて、ファール・カップ²²を付け、顔面への攻撃は寸止めすることが共通了解となっている。

対人練習を初めてやった際には、殴られ、蹴られる、そして自分も殴り、蹴るという行為に非日常的なものを感じた。つまり私はどこかでそれを喧嘩のようなものと捉えていた。しかし殴る蹴るという行為は、ジムにおいては技術の応酬として解釈される。こうしたことを、ジム生のEさんは、「外でやったら傷害罪ですよ」という言葉で表現していた。つまりジムという空間のなかで、一定のルールにのっとっていることが、喧嘩との違いを生むということである。

対人練習は、サンドバッグを使った個人練習の時のように全力でおこなうのではなく、微妙な力加減を加えることが求められる。たとえば初心者と上級者では、おのずと技術や体力に差がある。両者が本気でぶつかれば、初心者は一方的に痛めつけられ、場合によっては大きな怪我を負うことになる。そのため対人練習をする人は、相手に応じて力の出し方をコントロールする。コントロールしないと見なされると、会長やトレーナーから「もっとスピード落として」、「強く当てすぎ」といった注意が与えられる。

こうした点に関し、ジム生のBさんは、「空気を読んで」、すなわち互いの力量をはかりながら対人練習をするべきと述べた。つまり対人練習に参加する人は、単に技術を身につけているだけではなく、相手の力量をはかりながら、力をコントロールすることが必要になるのである。

対人練習における一定の技術や相手の力量に合わせる姿勢は、ジムで練習をする人々が共通して持っている身体文化であるといえる。以下は、ジムに通い始めて2か月ほど経ち、ある程度対人練習にも慣れてきた際のフィールドノーツからの引用である。この日は、Bさん、Cさん、Dさんを相手に、交代で蹴りマスをおこなった。彼

らはいずれも、ジムに通い始めて数年経つ中級者、上級者である²³。

「前回やった時より全然上手くなっている」とBさんから言われる。あまり自覚はない。そのせいかBさんの本気度合が上っていて、かなりバシバシ蹴られた。ハイ（キック）を受け損なって頭部を蹴られることも2回（強くあててないので、倒れるほどではないが）。こちらでも多少力を入れてやる。Bさんにはあまりクリーンヒットさせられないが、Cさんには何度かミドル（キック）を決められた。ただ体重差が50kgぐらいあるので、Cさんはかなり加減してくれている印象。またDさんともやったが、何とかしのげた（中略）Bさんとやっていると、他の人が全員で見てたりとかもあり、なんだか認められた感がある。Eさんからは笑顔で「やっとここまでできるようになりましたね」と言われた。

この日は、私が「上手くなっている」というBさんの判断をもとに、以前よりも打撃が強めにあてられている。私もそれに応じて力を調整している。Cさん、Dさんも同様に、力をコントロールしながら、蹴りマスをおこなっている。そして私の感じた「認められた感」や、最後のEさんの言葉からは、私が一定の技術を身につけただけでなく、力をコントロールしながら蹴りマスをおこなえるようになったこと、すなわちジム内の身体文化を実践できるようになったことに対する好意的な評価を読み取ることができる。

こうした協同的な身体文化の有り様は、ボクシングでも指摘されている。シカゴのボクシング・ジムでフィールドワークをおこなったロイック・ヴァカン（Wacquant, Loic）は、スパーリングについて次のように述べている。

初心者の中には放縦で抑制のない暴力の発散に見えるかもしれないものは、実際は、規則的で高度にコード化された応酬の織りものなのだ。この応酬は、暴力的ではあるが、にもかかわらず常にコントロールされており、ダイナミックで闘争的な平衡を創り上げ維持するという、対戦相手どうしの実践的で持続的な共同作業なのである（Wacquant 2000=2013:126）

多くの格闘技においては、対戦相手に有効な攻撃を加えることが求められる。有効な攻撃とは、場合によっては相手に大きな怪我を負わせるようなものであり、ヴァカンの言うように「暴力的」な側面を持つ。しかし日常の練習においては、何も考えずにむき出しの力をぶつけ合うのではなく、むしろ力をコントロールすることが求められる。そうすることではじめて、スパーリングは、喧嘩や力比べではなく、競技や練習としての意味を持つのである。

身体文化を介したコミュニケーション

通常の言語コミュニケーションが、共通言語をメディアとして成立するように、対人練習は、共通する身体文化をメディアとした非言語的なコミュニケーションの側面を持っている。

たとえば右構えの選手が右のミドルキックを蹴る際には、予備動作として、軸足である左足を少し左方向に踏み込む。予備動作は初心者ほど、大きく、遅くなりがちである。そこである程度経験を積んだ人は、相手の予備動作を見て右のミドルキックがくると予測し、相手の右側に踏み込みながら、軸足の内側をローキックで蹴る。相手は蹴ろうとしている最中なので軸足に力が入っており、こちらの蹴りを避けるににくい。これは軸足蹴りと呼ばれる技術である。

私は上級者と蹴りマスをする、よく軸足蹴りをもらった。主な理由は、私の予備動作が大きく遅いために、私が何をしようとしているのかが相手に筒抜けになっていたためである。しかし自分より経験の少ない人と蹴りマスをする、私は相手の軸足を蹴ることができた。その際に私は、予備動作から、相手が何をしようとしているかを判断している。以下は、ジムに入って間もないFさんと蹴りマスをした際のフィールドノートからの引用である。

ディフェンスの練習を一通りやってから、Fさんと蹴りマス。(Fさんの) 予備動作が大きい。カウンター練習を意識したら、結構、軸足が蹴れるようになっていることに気付いた。(中略) 知らず知らずのうちに、セオリー(カットの仕方から、パンチ、キックの出し方など)が身体に染みついてきたような感覚を覚える。あとは蹴りマスの際に、相手の隙、たとえばボディのガードが甘い等が見えるようになってきた気がする。

ここからは、相手の予備動作をみて、カウンターの軸足蹴りを試みていることが分かる。また相手の動作からディフェンスがおろそかになっている箇所などを「見て」攻撃していることが分かる。この場合の「見る」ということは、キックボクシングの「セオリー」を身体化することで、相手の動作を予備動作やディフェンスの穴として理解し、攻撃や防御のための起点にすることを意味する。

ここでいう「セオリー」は、ジム生やキックボクシングをやっている人々に共通する身体文化であり、非言語的なコミュニケーションのプラットフォームである。具体的には、パンチやキック、コンビネーション²⁴、ディフェンスの技術などであり、それらを読みながら攻撃や防御を組み立てる技術である。

「セオリー」の有り様は、異なった身体文化を持った相手と対戦する際に感じる一種のやりづらさからも、逆説的に理解できる。以下は、ボクシングを3年ほどやっていたGさんと蹴りマスした際のフィールドノーツからの引用である。

Gさんは上体や頭を細かく揺らしたり、肩を上げたり下げたりしながら構えている。そして動き続けている。フェイントも多い。左肩が動いたと思って構えると、右にパンチが飛んでくる。やりづらい。

頭や上体を細かく動かすGさんのスタイルは、ボクシングの身体文化を背景としている。ボクシングの身体文化は、私にとって馴染みが薄い。それゆえ私は、Gさんの動きから何らかの意味（攻撃や防御の起点となるような予備動作や隙）を読み取ることができず、やりづらさを感じているのだ。

さて、言語的なコミュニケーションが、身につけたボキャブラリーの数などに規定されるように、身体文化を介したコミュニケーションも、身につけた技術や経験などに強く規定される。ゆえに力量に大きな差がある場合には、自分の情報は相手に筒抜けになる一方で、相手の情報はほとんど処理できないという状態に陥る。以下は、ジムのトレーナーでもあるプロ選手のHさんと蹴りマスをした際のフィールドノーツからの引用である。Hさんはかなり手加減しているものの、私はほとんど何もできていない。

Hさんと2ラウンド（の蹴りマス）。完全に遊ばれてしまう。こちらの攻撃は全部かわされたりカットされたりする。まずクリーンヒットはしない。また攻撃のスピードも全然違うので、ローキックを3連打されたりする。見えていてもカットが追い付かない。そしてこちらがバランスを崩したところに、フィニッシュ・ブロー²⁸が飛んでくる（もちろん、あてないが）。完全に相手のペースにハマられている。さらに技術や体力だけではなく、間合い、タイミングの差を感じる。Hさんは、こちらの攻撃が当たる距離にいないのに、自分の攻撃は確実にあててくる。またこちらの打ち終わりに合わせてくる。

ここからは、Hさんが私の動作を読んで、的確な攻防をおこなっている一方で、私はなされるがままになっていることが分かる。体力や技術の絶対的な差があることは言うまでもないが、上のデータからは、私がいかに「見えて」いないか、「見えて」いてもディフェンスの動作が追い付いていないことが分かる。つまり私の情報はHさんに筒抜けになる一方で、私はHさんの情報はほとんど処理できないのだ。また間合

いやタイミングをいかに解釈し、自身の動作につなげるかという点に関しても、私とHさんには大きな差がある。それゆえHさんは、私の攻撃があたらない安全圏に身をおきつつ、自分の攻撃は的確にあてることができている。

これらのことから、身体文化を介したコミュニケーションが、身につけた技術や経験などに強く規定されることが分かる。

痛みをどう認識するか

正常な痛覚の持ち主であるならば、誰しものが身体的な痛みを感じる。しかし身体的な痛みの捉えかたは一律ではなく、各々の身体文化に強く規定されている。

たとえばロイック・ヴァカンは、ボクサーが修練を積む中で「肉体的苦痛に対する無頓着さを学ぶ」ことの重要性を指摘する（Wacquant 2000=2013:139）。これは痛みを感じないということではなく、痛みをことさら意識しないことを学ぶということである。

キックボクシングは基本的にフルコンタクトの競技であるため、打撃を受けることで痛みを感じることは少なくない。お互いに力をコントロールしている蹴りマスにおいても、偶発的に力が入ってしまうこともある。また慣れないうちは、サンドバッグを蹴ることで痛みを感じることもある。

私の場合は、当初、サンドバッグを蹴ることで強い痛みを感じていた。実際、サンドバッグを全力で蹴ると、足の甲からすねにかけて青あざができた²⁶。また蹴りマスの際にも、多少強めの打撃があたると、痛みで気後れしてしまい、動きが止まってしまうことが多かった。当初の私は、肉体的にも精神的にも、痛みに対する反応が過敏であったといえる。

しかし練習を続けていくと、痛みに対する反応が変わってきた。その理由のひとつに、痛みに対して身体的に強くなったことが挙げられる。練習によって筋肉痛などになることはなくなり、またサンドバッグを蹴ったり、対人練習で打撃があたったりしても、あざができにくくなった。

もうひとつの理由としては、痛みに対して精神的に無頓着になったことが挙げられる。キックボクシングにおいて、打撃をもらうことは日常的なことである。私はジムに通うなかで、そうした日常を共有するようになっていた。そのため打撃をもらっても、痛みは感じるものの、過度な驚きや恐怖を抱かなくなっていた。こうした点について、ジム生のIさんは、「（練習を）やっていくうちに、痛いとかそういうのが気にならなくなる」と表現し、打撃をもらうことが自明化していくことを述べている。

これをヴァカンの言う「肉体的苦痛に対する無頓着さ」が身につくプロセスと捉えることもできよう。しかし私を含めた多くのジム生たちは、怪我することに対して無頓着であったり、苦痛を無視したりしているわけでは必ずしもない。程度の差こそあれ、多くのジム生たちは、痛みに対して意識的である。痛みを感じた個所に念入りにテーピングを施したり、痛みに応じて練習内容を切り替えたりする人は珍しくない。

そして実際に怪我をすると、普段以上に身体の調子をうかがいながら練習する。たとえば私は、練習中に相手のひざを足に受け、右足の靭帯を損傷した。以下は、怪我をした日の2週間後にジムに行った際のフィールドノートからの引用である。2週間後なのは、病院で「2週間程度は練習禁止」と言われたためである。

この2週間で痛みはだいぶひいた。ただし右足には違和感が残っており、曲げ方によっては痛いので、あぐらはかけない。練習は右足をかばいながらになるので、右ストレート、左右のミドルキックに力が入らない。蹴りマスの際も、右足でカットすると、痛みが走る。自分自身の身体と会話しながら、通常よりは少なめだが1時間ほど練習して帰宅する。

ここからは、私が足の状態を「違和感」や「痛み」から判断していることが分かる。それらは怪我の症状であると同時に、私にとっては怪我が悪化しないために、これ以上は練習しない方が良いという判断の基準になっている。

医学的な判断に従うなら、痛みが完全にひいてからでないと練習するべきではない。しかし私は医学的な判断ではなく、自分自身で「痛み」をみながら練習している。すなわち痛みは、医学的な判断とは必ずしも一致しない、私自身の判断を導く情報源として捉えられているのである。

これは医学的判断に従っていないという意味では、ヴァカンの言うような「肉体的苦痛に対する無頓着さ」が現れた事例のように見えるかもしれない。しかし私自身の認識をふまえれば、それは「肉体的苦痛」を手掛かりとしながら身体を意識し、練習できるギリギリの範囲を模索する方法なのである。

キックボクシングにおける身体文化

ここまでの記述から、キックボクシングにおける身体文化の一端が明らかになった。

キックボクシングは、ジムという特定の空間において、共通する身体文化を通して実践される。それゆえに喧嘩やむき出しの暴力とは明確に区別される。またキックボクシングの身体文化は、キックやパンチなどの技術の有り様だけではなく、ジム内に

おける振る舞い（対人練習での力のコントロールの仕方など）を通して立ち現れる。また打撃による痛みを感じることがあるが、実践者は痛みに対してある意味で無頓着でありながらも、同時に痛みから何らかの意味を引き出す場合もある。

これまでの話をふまえ、キックボクシングにおける身体文化を簡単に類型化すると、技術、意識、ジムのルールという3つの次元に分けられる。さらに個々の次元で、明文化されやすい、されにくいという特徴がある（表1参照）。

表1 キックボクシングにおける身体文化の諸相

	技術に関わるもの	意識に関わるもの	ジムのルールに関わるもの
明文化されやすい	• 個々の技術	• 力量の把握	• 施設の利用法 • 練習の手順
明文化されにくい	• 間合い • タイミング	• 痛みに対する意識 • 恐怖心	• 対人練習での力加減

ここでいう明文化されやすいとは、マニュアル的に口頭で教育したり把握したりしやすいものであり、明文化されにくいとは、実践を通して経験的に理解されるものである。

まず技術に関しては、ある程度明文化して伝えることができる²⁷⁾。しかし間合いやタイミングなどについては、個々の身体的な特徴（手足の長短、身長の高低など）とも関わるため、対人練習を繰り返すなかで、自分で把握するしかない。次に意識に関しては、経験年数などから、自身や相手の力量を推察できる。しかし痛みや恐怖心は、練習を繰り返すなかで克服したり慣れたりするしかない。またジムのルールに関しては、施設の利用方法などはマニュアル化できるものの、力のコントロールに関しては、経験的に学ぶしかない。

また技術、意識、ジムのルールは、それぞれ互いに関連し合っている。たとえば個々の技術が未熟だと、自分の力量に関する評価も低くなり、相手に恐怖心を抱きやすい。しかし経験豊富で自分の力量にも自信を持っている人でも、ジム内で練習する限り、対人練習で相手を一方的に痛めつけることはできない。

おわりに

本稿は、もっぱら私自身の経験的なデータに依存するかたちで、キックボクシングにおける身体文化の一端を記述してきた。しかしそれはあくまでも一端である。より広範かつ一般的な身体文化の有り様に関しては、今後さらに調査を進める必要がある。

また前節でまとめた技術、意識、ジムのルールの各次元における身体文化を規定するものとして、キックボクシングを取り巻く外的環境や、文化的な特殊性——ジムの経営やマーケットの動態、競技団体の活動、興行やメディアとの関わり、歴史、社会的イメージなど——を想定することができる。しかし本稿のデータからは、それらを十分に捉えることはできない。

加えて本稿では、紙幅の都合上、先行する身体文化や格闘技に関する社会学的な議論——たとえば山本（2001）、池本（2007）、倉島（2007）、菱田（2008）などの格闘技と身体に関する研究や、より一般的なスポーツ、身体に関わる社会学の業績——を十分に検討し、本稿の位置づけを明確にするという作業をおこなえていない。こちらも今後の課題としたい。

¹ キックボクシングには、統一団体組織が無いため、ボクシングのような比較的厳密なプロ・テストが存在しない。そのためキックボクシングにおけるプロとアマチュアの差異は、そこまで明確なものではない。

² アマチュアの場合は、すねあてやひざあて、ヘッドギアなどを着ける場合が多い。

³ これはプロの場合である。アマチュアの場合、ラウンドあたりの時間やラウンド数は流動的であるが、概ねプロより短い。

⁴ <http://ja.wikipedia.org/wiki/キックボクシング団体一覧> DL:2013.12.28

⁵ また私自身の実践が記述の基になっているため、本稿はキックボクシングの上級者やプロ選手の身体文化を反映したものにはなりえない。そのような意味では、本稿には自ずと制約がある。

⁶ ジムの責任者の呼称。“A”ジムの場合もそうだが、多くのジムの会長が、元プロ選手である。

⁷ 足さばきのこと。動いた際にも、左右の幅が肩幅程度に保たれていることが良いとされる。

⁸ 左手で出す牽制的なパンチ。相手との距離をはかったり、後に続く技へのリードに使われたりすることが多い。

⁹ 右手で腰を入れて打つパンチ。通常、相手のあごや胃のあたりを狙う。

¹⁰ ウレタン、革などで形成された長方形の練習道具。通常、練習相手が持ち、そこにパンチやキックを当てる。

¹¹ 革、ないしは合皮製の円筒形の練習道具。鎖で吊るされており、そこにパンチやキックを当てる。

¹² 手を鉤のように曲げ、相手の身体の側面（みけんや肝臓）を打つパンチ。

¹³ 腕を少し曲げ、相手の身体の下の方から、あごや胃などを打つパンチ。

- ¹⁴ 相手の太ももを狙うキック。空手などの場合には、ひざ関節を狙うこともある。
- ¹⁵ 身体を回転させながら、すねで相手の脇腹（あばら）を蹴るキック。キックボクシングやムエタイでは多用される。
- ¹⁶ 足裏で相手のみぞおちに当てるキック。相手との距離を取る際にも使われる。
- ¹⁷ 手で相手のパンチを叩き落とすディフェンス技術のひとつ。
- ¹⁸ ひざをつかって身体をかがめ、顔面への攻撃を避けるディフェンス技術。
- ¹⁹ 上体を反らし、上半身への攻撃を避けるディフェンス技術。
- ²⁰ 相手が蹴ってきたタイミングでひざを上げ、相手の蹴りにあてるディフェンス技術。ローキック、ミドルキックに対して使われる。
- ²¹ 試合を模してラウンドごとに1対1でおこなわれる対戦形式の練習。
- ²² 臍丸部分を守るカップ。
- ²³ 空手や柔道などと違い、キックボクシングには明確な段位などは無い。そのため実力をはかる基準は、私の観察によるものである。
- ²⁴ パンチやキックは、単発で打っても避けられてしまいあたらないことが多い。そのため「左ジャブ、右ストレート、左フック、右ローキック」といったように、パンチやキックの組み合わせ方が重要になる。これがコンビネーションである。
- ²⁵ 相手にとどめを刺すような攻撃。
- ²⁶ 通常、キックボクシングでは、すねの部分で蹴る。足の甲があざになったのは、「正しい」蹴り方ができていないことを示す。
- ²⁷ ただしそれらを身体化するのには、個々人の反復練習を通してである。

文献：

- Foucault, Michel, 1975 “Surveiller et Punir: Naissance de la prison”, Gallimard=1977 (田村俣訳) 『監獄の誕生』新潮社.
- 菱田慶文、2008『ムエタイの賭博化変容』早稲田大学大学院人間科学研究科博士学位論文.
- 池本淳一、2007「日本ボクシングのエスノグラフィー：社会変動期に生きる若者のアイデンティティ構築とサブカルチャー実践の視点から」日本社会学会『社会学評論』58 (1)：21-39.
- 石岡丈昇、2013『ローカルボクサーと貧困世界：マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社.
- 倉島哲、2007『身体技法と社会学的認識』世界思想社.
- Wacquant, Loic. 2000 “Body and Soul” Oxford University Press. =2013, (田中研之輔、倉島哲、石岡丈昇訳)『ボディ&ソウル：ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー』新曜社.
- 山本敦久、2001「格闘する身体文化社会学序説：キックボクシングのフィールドワークから」日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』9号：119-128.